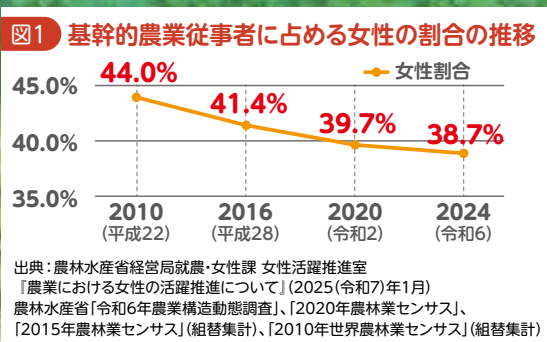


農業分野のジェンダー：女性の新規就農推進

女性は農業の重要な担い手ですが、基幹的農業従事者*1に女性が占める割合は、2010（平成22）年44.0％から2024（令和6）年38.7％になっており、5.3ポイント低下しています（図1）。女性が職業として農業を選択し、活躍できるような環境づくりが求められています。

*1 基幹的農業従事者……
農業就業人口のうち、普段の仕事として主に自営農業に従事している者



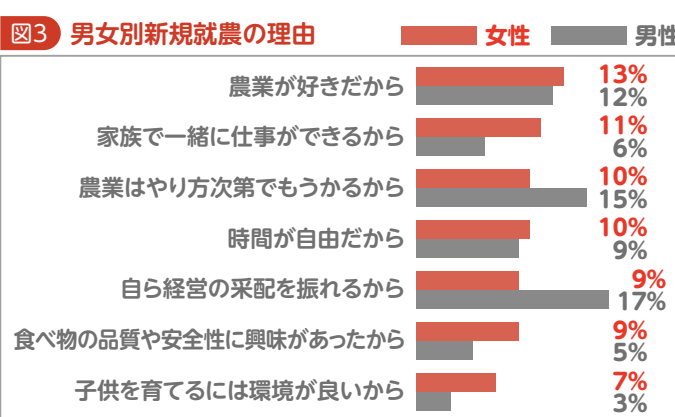
2023（令和5）年における新規就農者数は、男性30,780人に対して女性は12,680人となっており、全体の29.2％にとどまっています。（図2）



女性新規就農者の就農理由

新規就農者を対象にした調査（図3）によると、就農の動機として「農業が好きだから」という理由に性別で差はありませんが、異なっている回答もあります。男性は「農業はやり方次第でもうかるから」「自ら経営の采配を振れるから」が上位になっているのに対し、女性の場合は、「家族と一緒に仕事ができるから」「子供を育てるには環境が良いから」という家族やこどもの要素が男性に比べて高く、また「食べ物の品質や安全性に興味があったから」と回答する割合が高い点も特徴的です。女性が農業を仕事として選択する際に、家庭や子育ての充実や食の安全性などを重視していることがわかります。

出典：農林水産省「令和元年度 食料・農業・農村白書」 特集2 輝きを増す女性農業者（2020（令和2）年）
一般社団法人全国農業会議所新規就農センター「新規就農者の就業実態に関する調査結果」
（平成29（2017）年3月公表）を基に農林水産省作成



就農にあたり直面した悩み

調査（図4,5）によると、就農にあたり直面した悩みとして、女性は生活面では「健康上の不安（労働がきつい）」「子供の教育」、と回答した割合が男性よりも高くなっています。経営面では「技術の未熟さ」「栽培計画・段取りがうまくいかない」と回答した割合が高く、技術習得や経営手法などに悩みを感じている様子が伺えます。

出典：農林水産省「令和元年度 食料・農業・農村白書」 特集2 輝きを増す女性農業者（2020（令和2）年）
一般社団法人全国農業会議所新規就農センター「新規就農者の就業実態に関する調査結果」
（平成29（2017）年3月公表）を基に農林水産省作成

別の調査（図6）によると、「自身がリフレッシュする時間がとれない」「妊娠中に仕事を休めない」「子供が病気のときに預かってもらえる人や場所がない」といった不安や悩みがあることがわかりました。

図6 農業と出産・育児・子育てとの両立に関する不安や悩み（複数回答）上位5回答

自身がリフレッシュする時間がとれない	59.7%
妊娠中に仕事を休めない	43.3%
子供が病気のときに預かってもらえる人や場所がない	10.0%
近所に同年代の子供がいない	19.0%
母親同士の交流の場がない	17.9%

出典：農林水産省「2019年度女性活躍推進にかかるアンケート調査」（2019（令和元）年8月調査）
注）全国の農業女子プロジェクトメンバー、4Hクラブ、農ネット会員、農業担い手メルマガ会員、農業委員会、JA女性組織、全国生活研究グループ及び全国指導農業者連絡協議会を対象に行ったアンケート調査（有効回答者数993人）

埼玉県における農業分野のジェンダー主流化

埼玉県では、ジェンダー主流化*2を県の施策に反映させ、埋もれていた男女各々のニーズを取り入れた取組を進め、誰もが暮らしやすい社会づくりを目指しています。その一環として、昨年度から女性の農業活躍推進、特に新規農業者の育成・確保に力を注いでいます。

*2……「ジェンダー主流化」とは、あらゆる施策において、固定的性別役割分担、性差別、偏見等が社会的に作られたものであることを意識する視点を取り入れることで、一つの施策が結果として男女間で格差をもたらしていないかを点検し、施策効果の向上を図る取組です。

農業支援課の取組

埼玉県における女性の新規就農者の割合は25.6％（2018（平成30）～2022（令和4）年）と全国の29.2％（2023（令和5）年）よりも低い状況にあります。県では、女性の新規就農者割合を増やす取組を進めるため、まず、女性からの就農相談内容の分析を実施しました。その結果、就農を考える女性は、「就農相談会は男性ばかりだと思って参加しづらかった」と感じていたり、就農動機として「農業法人で働きたい」「小規模農業をやりたい」とする割合が男性よりも高いことがわかりました。

ジェンダー格差の実態把握

調査手法：就農相談時の相談カード分析
調査対象者：2004（平成16）年から2022（令和4）年までの就農相談者（4768人）

就農相談者		就農動機（複数回答）		男性	女性
男性	女性				
87%	13%	本格的に農業経営を行いたい		80%	61%
		農業法人で働きたい		8%	23%
		小規模農業をやりたい		9%	17%
		有機農業をしたい		5%	8%
		田舎暮らしをしたい		4%	4%
		農業体験をしたい		2%	4%

次に、既に就農されている女性農業者にヒアリングをしたところ、「女性が農業を行うには近くにトイレや更衣室が必要」「女性の農業者に教えてもらいたい」といった声がありました。そこで、2024（令和6）年度の取組には、女性を対象にして就農のPRに努めるとともに、農業法人が「女性が働きやすい環境整備」を行う際に補助するなどの支援などを行うことにしました。

女性が活躍できる農業の実現に取り組む

女性が就農するパターンとしては、個人経営だけでなく、農業法人等への就職も主要な選択となっています。一般的に農業法人等では、育児・介護休暇等の就業条件が整備されていることや未経験の女性でも農業技術を習得しやすいことなどがその要因と考えられます。今後、快適なトイレ等の施設整備など、女性がより働きやすい環境づくりが求められます。



多様な担い手確保PR事業

農業を職業の1つとして検討している女性等に対し、埼玉県を就農先としていただけるようPRする事業です。2024（令和6）年度は、県内で活躍する先輩女性農業者を講師とするセミナーを3回（2回は都内開催）、女性農業者が生産を行う現場での就農体験会の開催、女性農業者のPR動画及びインタビュー記事を掲載したWebを活用しての情報発信などを行いました。



女性の雇用就農促進事業

女性の進出が遅れている主穀（米や小麦など）、露地野菜、果樹を経営する農業法人において、衛生環境施設等の設置や女性従業員が使用する機械・備品の購入等、女性が働きやすい環境を整備するための費用を補助します。

2024（令和6）年度は、県内の2つの農業法人において、トイレの設置などに対して補助し、女性の雇用環境の整備を支援いたしました。

農業支援課 | 農業をはじめたい方への支援

<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0903/syunou/shuunousiensemina3shuusei.html>



埼玉県では、女性の皆様に本県での就農に関心を持っていただくための取組を展開するとともに、就農を希望される方に対する情報提供や相談を入口とする就農までのきめ細かい支援を実施し、引き続き女性の就農を推進してまいります。

近年では、機械化も進み、新規就農の女性に使いやすい機械等も増えています。技術面では、国や地方公共団体による各種研修や、地域単位での指導体制も拡充されています。農業に携わる女性をさらに増やしていくために、女性が参入しやすい労働環境の整備や支援策の充実など、多様な取組が進められています。

女性就農者にインタビュー

interview

農業を通じてさまざまな人が活躍する場を作りたい

仲間3人とともに合同会社「十色」を起業し、農業体験の企画・運営や唐辛子・かぼちゃ・小麦などの生産販売を行う。福祉分野との連携による農福連携の経験を活かし、さいたま市「見沼田んぼ」の農地を活用しながら、障害の有無や性別、国籍に関係なく、誰もが動きやすい環境づくりに取り組んでいる。

十色とうがらしファーム ホームページ <https://toiro-farm.com/company/>

合同会社「十色」2024（令和6）年度農山漁村女性活躍表彰「若手女性チャレンジ部門」受賞。

さちこ
サカール祥子さん
合同会社「十色」代表（さいたま市）



とうがらし唐辛子栽培への挑戦

就農にあたり、農地の確保には苦労しました。最初は、この地域で米作りをしていたNPOの人たちから地元の農家さんを紹介していただき、ようやく土地を借りることができました。地元農家さんとの信頼関係を築くことが重要であると感じています。

小規模ながらも需要のある唐辛子に着目し、現在では約40種類の唐辛子が無農薬・無化学肥料で栽培しています。また、展示会でのPR活動にも積極的に取り組み、唐辛子の魅力を広く発信しています。



女性就農の課題と支援の現状

当初は、さまざまな場面で、女性の新規就農者に対する偏見を感じることがありました。しかし、現在では行政の支援が進み、さらに農業支援に関わる女性職員の増加も相まって、相談しやすい環境が整いつつあると実感しています。

「十色」では多様な人材をパートタイムで雇用していますが、特に多いのは主婦層です。フルタイムで働くことが難しい子育て中の女性にも、働く場を提供したいという思いがあります。

一方で、子育て中の女性が早朝出勤することの難しさや、今年のような酷暑による熱中症のリスクなど、さまざまな課題もあります。トイレの設置や子育て世代が働きやすい環境整備など、女性が安心して働ける環境づくりが、今後の課題として残っています。

女性農業者としての活躍と今後

事業を成功させるためには、経営的な視点が欠かせません。作物を育てる技術だけでなく、経営スキルの研修や専門家との連携を支援する仕組みが、さらに充実することを期待しています。また、これからの農業者には、他分野や企業との交流を積極的に行い、新たなアイデアを生み出す場に参加することが求められると感じています。こうした取組が、事業の発展につながるのではないのでしょうか。

これから様々な人が農業につながる機会を作り、「誰もがそれぞれの立場で活躍できる農業」を実現していきたいと思います。

